

## 平成 29 年度 KICS 外部評価委員会 議事要録

日 時 平成 29 年 6 月 26 日 (月) 13:30 ~ 16:30  
場 所 高知大学地域連携推進センター2階 セミナー室  
出席者 別紙のとおり

### 次第

1. 開 会
2. 議 事
  - (1) 平成 28 年度外部評価委員会指摘事項に対する対応について
  - (2) 平成 28 年度補助事業実績報告について
    - ①事業目的別分類：教育
    - ②事業目的別分類：研究等
    - ③事業目的別分類：社会貢献
    - ④事業目的別分類：全体
  - (3) UBC 活動報告
3. 講 評
4. 閉 会

### 委員会資料

平成 29 年度 KICS 外部評価委員会 名簿  
平成 28 年度 KICS 外部評価委員会 議事要録  
資料 1 平成 28 年度外部評価委員会 指摘事項対応  
資料 2 自己評価書 (事業目的別分類：教育)  
資料 3 自己評価書 (事業目的別分類：研究等)  
資料 4 自己評価書 (事業目的別分類：社会貢献)  
資料 5 自己評価書 (事業目的別分類：全体)  
資料 6 UBC 活動報告 (各 UBC 別)  
資料 7 外部評価フレーム (平成 28 年度最終版)  
資料 8-1~8-4 各種アンケート結果 (学生・教職員・自治体・企業)  
資料 1-1~5-5 各種参考資料  
別 添 平成 28 年度 COC/COC+全国シンポジウム報告書  
机上配布 進行表  
「地 (知) の拠点大学による地方創生推進事業 (COC+)」  
平成 28 年度評価 評価結果について

## 1. 開 会

櫻井理事から開会の挨拶が行われ、議事に先立ち、外部評価委員の紹介及び委員から挨拶が行われた。また、机上配布資料「「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」平成 28 年度評価 評価結果について」に基づき、評価結果の報告が行われた。

次に事務局から平成 29 年度 KICS 外部評価委員会の概要、進行について説明があった。

## 2. 議 事

### （1）平成 28 年度外部評価委員会指摘事項に対する対応について

資料 1 に基づき、吉用部門長から、平成 28 年度外部評価委員会指摘事項に対する対応について説明があった。

（質疑応答については別紙に記載）

### （2）平成 28 年度補助事業実績報告について

#### ①事業目的別分類：教育

資料 2 に基づき、吉用部門長から、平成 28 年度補助事業実績報告の教育分野について説明があった。

（質疑応答については別紙に記載）

#### ②事業目的別分類：研究等

資料 3 に基づき、石塚副センター長から、平成 28 年度補助事業実績報告の研究等分野について説明があった。

（質疑応答については別紙に記載）

#### ③事業目的別分類：社会貢献

資料 4 に基づき、吉用部門長から、平成 28 年度補助事業実績報告の社会貢献分野について説明があった。

（質疑応答については別紙に記載）

#### ④事業目的別分類：全体

資料 5 に基づき、吉用部門長から、平成 28 年度補助事業実績報告の全体分野について説明があった。

（質疑応答については別紙に記載）

### （3）UBC 活動報告

資料 6 に基づき、各 UBC から、平成 28 年度における活動や住民意識及び評価等の内容について説明があった。

（質疑応答については別紙に記載）

### 3. 講評

各委員が講評事項について20分程度の打合せを行い、委員を代表して眞鍋委員長から講評が行われた。講評内容は以下のとおり。

事業全体を通じて、着実に目標を達成しており、大きな成果を挙げていると感じる。今後の要望は、以下の三点。

- ① COC 補助事業終了後の継続の在り方について、地域の大学としての最先端に行くような新しい展開を考えて欲しい。
- ② KICS 事業を持続可能なものにする為に、新たな UBC を育成するシステム作りを行って欲しい。
- ③ 地域との関係性をより良く継続していけるような、地域側の人づくり、システム作りをお願いしたい。

### 4. 閉会

受田地域連携推進センター長から講評で頂いた意見を真摯に受け止め今後の活動に生かすこと及び委員会への謝辞と閉会の挨拶が行われた。

以上

## 平成 29 年度 KICS 外部評価委員会出席者名簿

### ≪外部評価委員≫

氏 名	所 属	備 考
眞鍋 和博	北九州市立大学 地域創生学群長、地域共生教育センター長	委員長
中澤 慎二	高知市 副市長	委員
吉澤 文治郎	ひまわり乳業株式会社 代表取締役社長	委員

### ≪高知大学≫

氏 名	所 属	備 考
櫻井 克年	理事（総務・国際・地域担当）	KICS 化事業実施担当責任者
受田 浩之	地域連携推進センター長	
石塚 悟史	地域連携推進副センター長	
吉用 武史	地域連携推進センター域学連携推進部門長	
赤池 慎吾	高知大学地域コーディネーター（安芸地域担当）	
大崎 優	高知大学地域コーディネーター（高知市地域担当）	
岡村 健志	高知大学地域コーディネーター（幡多地域担当）	
梶 英樹	高知大学地域コーディネーター（嶺北地域担当）	
平井 敏彦	研究国際部部長	
芝 弘行	地域連携課課長	
片岡 清茂	地域連携課課長補佐	
小島 真一	地域連携課域学連携推進係係長	
川口 俊司	地域連携課域学連携推進係係員	
都築 由佳	地域連携推進センター特任職員（広報担当）	
大道 知未	地域連携推進センター特任職員（教育担当）	
岡本 恭一	高知大学自治体連携コーディネーター	
横山 光一	高知大学自治体連携コーディネーター	
川澤 慶洋	地域連携推進センター地方創生推進部門長	

## 平成 29 年度 KICS 外部評価委員会 議事における質疑応答

### (1) 平成 28 年度外部評価委員会指摘事項に対する対応について

眞鍋委員長：指摘事項No.1 の対応について、「UBC 同士が地域間連携することで新たなシーズ・ニーズの発掘と対応を行う。」とあるが、具体的にはどのような連携がなされたのか。

岡村 UBC：「芸西村の地場産品直売所の機能強化」の案件を例に挙げると、事業全体のマネジメントを赤池 UBC が担当し、私は外商プログラムの企画支援を担当した。他の案件では、「黒潮町社会福祉協議会ボランティアコーディネート機能の強化支援」において、私が事業全体のマネジメントを担当し、町内のボランティアのニーズ調査を梶 UBC が担当している。

いずれの事業においても、各 UBC が得意とする分野を互いにシェアしながら事業を推進している。

吉澤委員：指摘事項No.3 の対応について、「UBC インターンシップ」について説明をいただきたい。

吉用部門長：UBC が実際に携わっている事業に学生が参加・体験するプログラムであり、テーマは各 UBC が企画している。なお、本事業は準正課プログラムであるため、必ずしも時期に縛られるものではなく、学生が正課活動外で参加が出来るよう、学生のスケジュールに合わせたインターンシップとなっている。時間数は各テーマ 30 時間程度と比較的長時間で実施されている。

吉澤委員：平成 28 年度の参加学生はどれくらいであったか。

川澤部門長：6 名の学生が参加した。

眞鍋委員長：インターンシップは、1 日あたりではどれくらいの時間数で実施されているのか。

川澤部門長：テーマによって若干のばらつきはあるが、1 日あたり 5～6 時間、概ね 5 日～1 週間程度で終了するプログラムとなっている。

### (2) 平成 28 年度補助事業実績報告について

#### ①事業目的別分類：教育

中澤委員：地域志向教育経費の選考基準について教えていただきたい。また、採択漏れとなったものはあるのか。

吉用部門長：地域志向教育経費公募要領において「最優先課題」を設定し、これに沿ったテーマの事業を優先的に採択している。最優先課題は、「高知県地域社会連携推進本部」にて高知県庁と意見交換し、県内における地域課題を最優先課題としている。また、採択の可否については、公募要領に記載された趣旨やルールに則った事業であれば、基本的に採択を行っている。

眞鍋委員長：採択された経費は、主にどのような使途で使用されているのか。

吉用部門長：本経費は地域志向科目の開設のために必要な経費として措置しており、用途についてもそれに関連するものとなっている。具体的には、授業実施時に必要となる物品の購入費用や、地域課題の調査に係る旅費等となる。

眞鍋委員長：地域関連科目受講生アンケートについて、地域関連科目を複数受講している学生は複数回アンケートに回答していると考えるが、アンケートの集計はどのように行っているのか。

吉用部門長：地域関連科目すべてを対象にアンケートを実施しており、集計は延べ回答数を基準に行っている。

中澤委員：文部科学省のフォローアップアンケートについて、地域関連科目の理解深化において「わからない」と回答した割合が増加傾向にあるが、この点について分析を行っているか。

吉用部門長：学生アンケートを徹底して行ったことにより、全体の回答数が増加したことが要因であると考ええる。

眞鍋委員長：職員対象アンケートにおいて、KICS 事業における認知度が低いと見受けられるが、要因は何か。

小島係長：職員アンケートの対象者には、附属病院の看護師や検査技師等、診療を主業務とする職員が多く含まれていることが要因であると考ええる。アンケート実施のたびに KICS 事業についての紹介や説明を行う等、周知の努力を行っている。

## ②事業目的別分類：研究等

中澤委員：UBC 活動における地域からの相談案件について、地域とどのような関わり方をしているのか教えていただきたい。

赤池 UBC：相談案件については、ちょっとした相談から研究分野の相談まで多岐にわたるが、相談の入口は広く構え、出来るだけ早く精査して大学の関わり方を明確にすることを心がけている。ただ、現状は安芸地域を中心とした活動となっており、担当している他地域との関わりと比べて偏りがあると感じている。

吉澤委員：UBC の活動は地域に定着していると感じるが、これまでの KICS 事業の成果を来年度以降にどう繋げていくかを検討していく必要がある。

櫻井理事：大学としても、UBC の取組みは継続していく。KICS 事業全体についても次のフェーズに向けた議論が行われている。

眞鍋委員長：大学と地域を繋ぐ UBC の取組みは全国のモデルとなり得るものであり、他地区にも展開すべきものであると感じている。

眞鍋委員長：受託研究、受託事業等の締結について素晴らしい成果を挙げているが、それがどのような経済波及効果をもたらしているか、アウトプットを意識した活動を行っていくことが重要であると考ええる。

石塚副センター長：受託研究等により商品化が行われた際は、経済波及効果の分析は当然求められるものなので、意識して取り組んでいく。

櫻井理事：土佐 FBC 事業では、事業内で生まれた商品による経済波及効果の分析を行っている。

受田センター長：土佐 FBC 事業に関しては、プラットフォームを持続していく為のキャッシュフローを生み出す上で、アウトカムの説明は必ずしていかなければならないと考えている。現在アウトプットからアウトカムへの移行が徐々に行われており、今後より一層意識して可視化していきたい。

### ③事業目的別分類：社会貢献

吉澤委員：公開講座の参加人数はどれくらいか。また、参加者層はどのようなものか。  
吉用部門長：1講座あたり概ね20人程度である。参加者層については、開催自治体が希望する講座の内容により変化はあるが、比較的高齢者が多い。大学で行われている教育や教員を地域に知ってもらう為にも、公開講座は有効であると考えている。  
受田センター長：公開講座のメニューは地域のニーズに合わせて決定しており、子育て世代向けの講座や、高齢者向けの体操の講座等、講座内容が多様化している。今後は現在の多様化したものを収束させていくか、または更に多様化させていくのか、方向性を検討する必要がある。

眞鍋委員長：地域再生研究会と高知SBIシステム研究会について、それぞれどのようなことを行っているのか、教えていただきたい。  
吉用部門長：地域再生研究会は、大学と地域がそれぞれの活動について情報交換を行っている。高知SBIシステム研究会は、インターンシップ学生を受け入れる企業との打合せや協議を行ったり、企業側の要望を聴取する場となっている。  
大道特任専門職員：高知SBIシステム研究会では、インターンシップ学生の指導をするスーパーバイザー（企業の若手社員）を企業に選定してもらい、その企業の社長がスーパーバイザーを支援するという体制をとっている。スーパーバイザーが学生の指導を行う上での悩みや課題、気付きを研究会で共有し、成長する場にもなっている。

眞鍋委員長：土佐FBC事業について、「11名の修了生（本学学生）が高知県に就職した」とのことであるが、高知県での就職に至った具体的な要因を教えていただきたい。  
受田センター長：就職者数については2017年3月までの総数である。土佐FBC事業を学生にも開放することで、社会人の学びの場を見てもらい、社会人と共に学ぶことで地域の企業を知ってもらう狙いがあり、その事が県内就職に至った要因の一つであると考えている。また、学生が参加することで、社会人受講生にも良い刺激を与えている。

中澤委員：土佐FBC事業においてアンケートを実施しているが、具体的にどのような内容なのか。また、修了生からの相談はアンケート内で行っているのか。  
受田センター長：アンケートは、事業のアウトカムを調査・フォローアップする為に実施した。修了生のフォローアップについては、土佐FBCの教員が別途受付・対応を行っているほか、「土佐FBC倶楽部」という同窓会組織があり、修了生同士が交流し、相談出来る体制を作り、綿密なフォローアップを行っている。また、土佐FBC事業の次のフェーズとして「土佐FBCⅢ」の検討を行っており、修了生のケアを含めた事業全体の在り方について議論を行っている。

### ④事業目的別分類：全体

吉澤委員：全国シンポジウムは今後も高知で開催する予定なのか。  
受田センター長：今年度のシンポジウムは高知で開催する予定である。高知で開催することで、高知の経済効果に寄与すると共に、他大学に高知の現状を知っていただくことで、COC事業の意義が大きなものになっていくと考える。その為にも、我々がリーダーシップを発揮して、COC事業のモデルを構築する必要がある。

眞鍋委員長：「高知県地域社会連携推進本部」において抽出・共有された課題や成果を、どのように学内の教員に還元しているのか。

櫻井理事：学長をトップとする「国際・地域連携推進機構」にて役員に周知をし、その後「教育研究部会議」において学内教員への共有を行っている。

眞鍋委員長：地域における大学の在り方が変容しており、その事をいかに教員に伝えて全学的に取り組むを行っていくかが重要であり、同時に困難な部分であると感じる。

受田センター長：学内外からの様々な意見をすり合わせることで、地域の大学としてやるべきことの意識が高まっていくと考える。「やらされている感」があると地域志向とは言えない。

中澤委員：えんむすび隊の実施によって、同じ学生が何回も参加しているような事例はあるのか。また、参加した学生の意識の変化をどのように認識しているのか。

吉用部門長：えんむすび隊はリピーターが多く、様々な企画に参加してもらっている。また、えんむすび隊の実施後に参加学生に振り返りをしてもらっているが、特にリピーターの学生に意識の変化がある。

### (3) UBC 活動報告

眞鍋委員長：地域から抽出した案件を学内教員に繋ぐ際に気を付けている事はあるか。

赤池 UBC：あまり関わりが無い教員いきなり案件を持ち込んでもうまく話が進まないケースがあるので、信頼できる教員にまず相談し、案件とマッチする教員を紹介してもらおうようにしている。

岡村 UBC：教員にどの程度のレベルで案件に関わってもらうか、地域側が期待するアウトプットと照らし合わせながら相談を行うようにしている。

石塚副センター長：教員の研究の守備範囲はどれくらいか、また案件に対してどこまで関与する意思があるのかをヒアリングしながら判断している。

吉澤委員：UBC 活動について、間口を広げながら活動していくのか、あるいは定義的に活動していくのか、今後の方向性について教えていただきたい。

受田センター長：これまでの活動の成果により、UBC は地域のキーパーソンとなっている。今後も同じ地域で常駐し続けることが、UBC 個人、大学にとって良い事なのかを考えなければならない。ただ、UBC 間の連携でも見られるような、地域の枠に囚われない活動が活発になってきており、UBC それぞれの進路が大きくなっているように見受けられる。